

第 103 回松本歯科大学大学院セミナー

日 時: 2005 年 12 月 8 日(木) 17 時 30 分~19 時 00 分

場 所: 実習館 2 階総合歯科医学研究所セミナールーム

演 者: 吉村 篤利 氏

(長崎大学医学部歯学部附属病院(むし歯・歯周病治療室)・講師)

タイトル: デンタルプラークの TLR4 活性化作用が歯周組織へ与える影響について

歯周炎は歯面に付着したプラーク中の細菌を原因として発症する炎症性病変である。歯面に付着したプラークの量が増加すれば炎症は悪化し、口腔清掃状態が改善すれば炎症は軽減する。しかしながら、口腔衛生状態が不良であっても歯周炎を発症しない患者や、逆に比較的プラークの付着が少なくても進行性の歯周炎を発症する患者がみられ、単にプラークの付着量だけで歯周炎の進行は説明できない。我々は、プラーク中の菌体成分がパターン認識レセプター Toll-like receptor (TLR) 2 および TLR4 によって自然免疫系に認識され、これらのレセプターは歯周組織に恒常的に発現していることから、プラークの TLR2 および TLR4 活性化作用と歯周疾患臨床指数との関連性について解析した。長崎大学医学部歯学部附属病院むし歯・歯周病治療室を受診した外来患者からプラークを採取し、TLR2、TLR4 依存性 NF- κ B 活性化作用を測定し、この活性を被検部位の臨床指数と比較した。その結果、縁上プラークの TLR4 依存性 NF- κ B 活性化作用と、プラーク指数、歯肉炎指数、ポケットの深さとの間には関連性が認められたが、TLR2 依存性 NF- κ B 活性化作用との間には統計学的に有意な関連性は認められなかった。

今回の発表では、これらの結果をもとに、プラークの成熟に伴う細菌組成の変化が歯周組織の炎症波及に及ぼす影響についてお話ししたい。

硬組織疾患制御再建学講座 小林 泰 浩